

内湖を活用したニゴロブナ種苗放流魚の琵琶湖における漁獲状況

孝橋 賢一・根本 守仁・亀甲 武志

1. 目的

県では平成 23 年度から内湖の在来魚の生産機能を回復するため、西の湖をモデルケースとして、電気ショックポートを用いた外来魚の集中駆除を行うとともに、ニゴロブナとホンモロコふ化仔魚の水田放流を行っている。今回は、本事業の効果を評価する一環として、ニゴロブナ放流魚の琵琶湖への拡散状況を調査した。

2. 方法

ニゴロブナ仔魚を放流した水田は、西の湖の周辺に位置し、水路を通じて排水が西の湖へ流入する合計 48,100m² である。この水田に 3 日齢の ALC 耳石標識を付けたニゴロブナのふ化仔魚（以下 Sr* 標識魚）2,274 千尾を 5 月下旬に収容し、36～39 日後の中干し時に約 464 千尾（体長約 16～36mm）を西の湖に流下させた。その後、流下した標識魚の拡散状況を把握するため、翌年の 2 月以降に琵琶湖において、漁業者の沖曳網（2～3 月）による漁獲物サンプルの標識確認を行った。

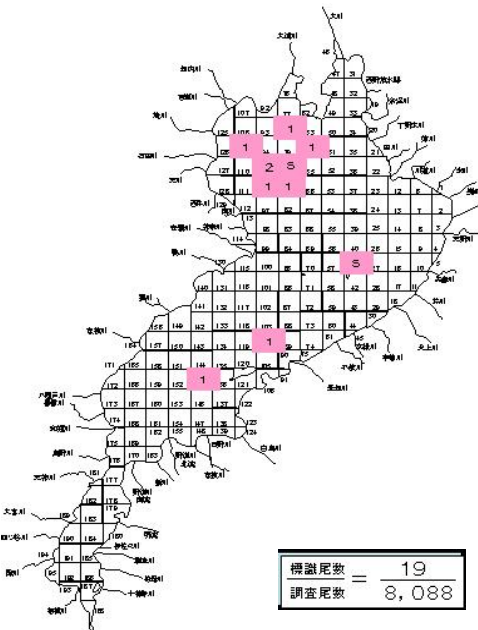


図 1 漁獲標本中の Sr 標識魚の分布

3. 結果

ニゴロブナの当歳魚 8,088 尾を調査したところ、Sr 標識魚は 19 尾含まれていた。Sr 標識魚の採捕場所を図 1 に示した。偏ることなく北湖の広範囲で採捕されていることから、西の湖から移動してきたニゴロブナ稚魚は、比較的速やかに琵琶湖北湖全体に分布を広げるものと考えられた。また Sr 標識魚と琵琶湖に直接に流下する水田に放流したニゴロブナ仔魚（以下 Dot* 標識魚）および同時に採捕された天然魚の体長を比較したところ、天然魚と両水田放流魚に有意な差は見いだせなかったが、Sr 標識魚は、Dot 標識魚と比較して有意に大きかった（図 2）。

今回の調査結果から、西の湖由来の放流魚は、他の水田放流魚より成長が良い結果となったが、今後この原因について検討していく必要がある。

* : Sr 標識は、ふ化仔魚時、Dot 標識は、発眼卵に ALC 耳石標識を施したもので互いに識別可能である。

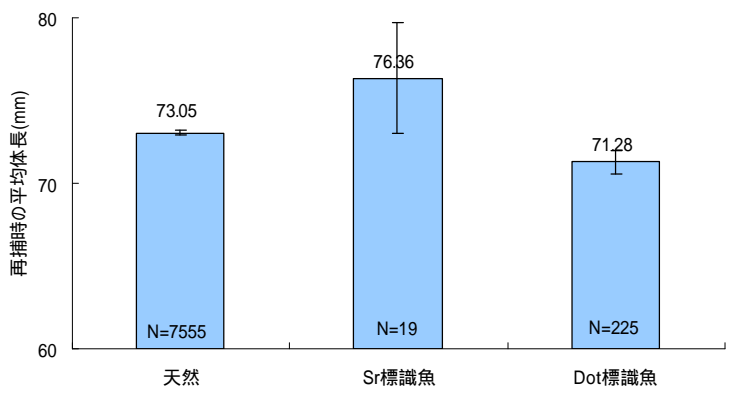


図 2 天然魚と水田放流魚の体長の比較の符号同士で有意差あり ($p < 0.05$)